

『伊曾保物語』下巻28「鳩と狐の事」とスペイン語版イソップと『カーラとディムナ』

Comments on the earliest Japanese translation of Aesop's Fables and the Arabic "Kalila and Dimna"

兵頭俊樹

Toshiki HYODO

(教育学部ドイツ語教室)

2014年9月30日受理

16世紀後半に日本に入ってきたイソップ寓話は所収寓話の対応などから、15世紀後半にドイツのウルムでシュタインヘーヴェルが編訳出版したラテン語・ドイツ語版『イソップ』の流れを汲む1489年刊スペイン語版『イソップ』がその底本に近いのではないかと考えられている。『伊曾保物語』下30「人の心のさだまらぬ事」に対応する話が、シュタインヘーヴェル版にはないが、このスペイン語版に見られるのがその有力な根拠のひとつである。さらにその後のスペイン語版には東方の寓話集ともいべき『カーラとディムナ』に含まれる寓話が3編加わり、1546年版ではこの寓話集全編が付け加わっている。そしてその最後の話が、これまでのシュタインヘーヴェル版やスペイン語版には見出だされなかった『伊曾保物語』下28「鳩と狐の事」の原話であると考えられるのである。本論ではその過程を考察し、さらにスペイン語版からアラビアの『カーラとディムナ』に至るまでこの「鳩と狐」の話を遡って比較検討する。

I 『イソップ』終結部の話の出入りと『カーラとディムナ』

仮名草紙の『伊曾保物語』(1639頃)および『天草本伊曾保』(エソポのハプラス)(1593)上巻は所収寓話の対応などから、1476年頃にドイツのウルムでシュタインヘーヴェルが編訳出版したラテン・ドイツ語版『イソップ』(以下この版をシュタインヘーヴェル版と略記)に基づく1489年刊スペイン語版『イソップ』がその底本に近いのではないかと考えられている。『伊曾保物語』の話でシュタインヘーヴェル版に対応が見出せないものとして、イソップ伝の部分では上14「中間とさぶらひと馬をあらそふ事」、中7「伊曾保人に請ぜらるゝ事」、寓話部では下17「鼠の談合の事」、下28「鳩と狐の事」下30「人の心のさだまらぬ事」、下34「出家と盗人の事」が挙げられる。¹このうち下30「人の心のさだまらぬ事」は、1489年スペイン語版で最終話として付け加わったポッジョの「ロバ売り親子」という笑話であることが確実であり、この版かそれ以後の版から『伊曾保物語』に入ったと推測されている。²シュタインヘーヴェル版を端緒として、ヨーロッパの諸言語に訳された『イソップ』が次々と出版される。本論ではシュタインヘーヴェル版とスペイン語版(1489,1496,1520,1546)のそれぞれ最後に収められた主にポッジョに遡る10ばかりの話を手がかりに、さらにスペイン語版で加わった東方の寓話『カーラとディムナ』を検討し、ここに『伊曾保物語』下28「鳩と狐の事」の原話を見る。

目次と版画と1489年スペイン語版の英訳も手がかりにすれば、イソップ終結部の話の出入りは概観しやすい。³次ページの表中 Kalila は『カーラとディムナ』(以下『カーラ』と略記)のスペイン語版。シュタインヘーヴェル版の終結部はポッジョの笑話7話である。サラゴサ1489年版では、シュタインヘーヴェル版の3話が削られて、別の4話が入る。そのうちの「仕立屋と弟子」はポッジョ部の前に置かれたアルフォンシの最後の話をここに移したもの。ブルゴス1496年版は、サラゴサ版の話の後に『カーラ』から3話、さらに別の1話が加わる。セビリヤ1520年版は、サラゴサ版の話の後に4話加わる。そのうち3話は、シュタインヘーヴェル版にはあったがサラゴサ版では採り入れられなかった話が訳されて入った。残る1話はサラゴサ版で加わった最後の話と同じ。アントワープ1546年版では、これまでのスペイン語版すべてに共通する8話のうち「犬と司祭」の話が削られ、ブルゴス版に入った『カーラ』の3話はなく、新たに『カーラ』の「ライオンと狐」の話が加わり、さらにその後に『カーラ』全編がつけ加わっている。したがって奇妙なことに「ライオンと狐」の話はこの版で重複することとなる。

『カーラ』は、インドの寓話集『パンチャタントラ』を核に、ペルシア、アラビアを経て西進しヨーロッパへ至る過程で話が加わり成長していったもので、ギリシアのイソップに匹敵する東方の寓話集とみなされる。その最初のスペイン語訳は13世紀であったが、ここで関係

するのは印刷本として出た第2次のスペイン語訳(1493/1494/1498など)である。このスペイン語版『カリーラ』から3話がブルゴス1496年版『イソップ』の最後のほうにほぼ同じ版画と本文で入る。⁴この時は版画を含んで4頁の混入という程度であった(図版1&2)。それがアントワープ1546年版『イソップ』では『カリーラ』全編が付け加わる。これはページ数で本来のイソップ伝・

寓話に匹敵する分量であり、もはや混入というよりは合本と言えるほどである(図版3&4)。そしてその最終章が「鳩と狐」の話で、おそらくこれが『伊曾保物語』下28「鳩と狐の事」の原話である(図版5)。なおこの版はこれまでの『イソップ』や『カリーラ』に見られた版画は全くなく、テキストのみである。以下のテキストと訳は便宜的に場面を区切った。

発行年	シュタインヘーヴェル版	スペイン語版				『伊曾保物語』
	c.1476年版	1489年版	1496年版	1520年版	1546年版	
発行地	ウルム	サラゴサ	ブルゴス	セビリア	アントワープ	
1	鳩小屋の夫	鳩小屋の夫	鳩小屋の夫	鳩小屋の夫	鳩小屋の夫	
2	神様の子	神様の子	神様の子	神様の子	神様の子	
3	偽善者	悪魔と悪婆	悪魔と悪婆	悪魔と悪婆	悪魔と悪婆	
4	不能	仕立屋と弟子	仕立屋と弟子	仕立屋と弟子	仕立屋と弟子	
5	愚者	愚者	愚者	愚者	愚者	
6	畸形	犬と司祭	犬と司祭	犬と司祭	猿とクルミ	→中6「さぶらひ鶉鷹にすく事」 (犬と司祭)→下29「出家とゑのこの事」
7	犬と司祭	猿とクルミ	猿とクルミ	猿とクルミ	ロバ売り親子	→下30「人の心のさだまらぬ事」
8		ロバ売り親子	ロバ売り親子	ロバ売り親子	偽善者	
9			Kalilaから(1)	偽善者	Kalilaから(4)	
10			Kalilaから(2)	不能	Kalila全編	
11			Kalilaから(3)	畸形	(最終章「鳩と狐」)	→下28「鳩と狐の事」
12			ヴィーナスと鶏	ヴィーナスと鶏		

Kalilaから (1) = 商人と不実な預かり人 = Los mures que comían hierro = No deve ballar fe quien no la sabe guardar

(2) = 騙された修道僧 = El religioso y los tres ladrones = La mentira de muchos: muchas vezes tiene lugar de verdad

(3) = 妻に欺かれた指物師 = El carpintero engañado por su mujer = Ala mala muger no hay nada impossible

(4) = ライオンと狐 [山犬]

左から順にアラビア語版『カリーラ』の邦訳での話のタイトル、2007年スペイン語校訂版『カリーラ』(p.25)でのタイトル、1496年スペイン語版『イソップ』巻末目次でのタイトル。

II スペイン語版『カリーラ』の「鳩と狐」

Exemplario contra los engaños y peligros del mundo.
Zaragoza 1493.

1 [鳩と狐]

Tenía una paloma su nido en un árbol muy alto, en el qual con mucho trabajo levava el comer a sus hijos. Y al tiempo que sacava los hijos llegava una raposa al pie de aquel árbol y menazávale tan terriblemente y cruel que de miedo la paloma, por salvar la vida, rendía los hijos a la raposa para que los comiesse.

2 [鳩と助言する鳥]

E como lo viesse un páxaro que estava en otro árbol delante, hubo compassión de la forma como la paloma echava sus hijos y díxole: «Manzilla es y dolor de ver tu crueldad y trabajo, y hazes de miedo lo que no çufre razón ni natura. Por ende te consejo que quando la raposa viniere y te menazare como suele hazer le digas: <Amiga,

si acá pudieres sobir donde yo estoy, mi temor será justo y la causa de mi crueldad asaz razonable, y podrán tanto tus amenazas que te libraré en esse punto mis hijos. Y si aquesto no puedes hazer, en vano trabajas de amenazar a quien está en seguro de ti.> » Y dado aqueste consejo, se bolvió a su árbol el páxaro.

3 [再び鳩と狐]

Viniendo el tiempo que la paloma sacava los hijos, llegó la raposa al pie de árbol y comenzó de amenazar y bravear como solía. Respuso la paloma: «Amiga mía, el menazar es por demás a quien vive en lugar seguro. Si puedes sobir acá donde yo estoy, ofrezco desmampararte en esse punto mis hijos; donde no, toma paciencia, que no los delibero perder tan cruelmente sin ver causa por qué.» Dende que vio la raposa que la paloma tenía nuevo consejo, díxole: «Si me dizes quién te dio este consejo ofrézcode de nunca enojar ni pedirte tus hijos.» Respuso la paloma: «Esse páxaro que

está allí delante en esse árbol en el orillo del río.»

4 [狐と鳥]

Y dexando la paloma, fuese la raposa al páxaro y, hablándole con palabras muy amigables, le dixo: «Dime, amigo, si gozes, quando te da el viento del lado drecho, ¿dónde pones por reposar la cabeça?»

Respuso el páxaro: «Debaxo de la ala izquierda. Y quando me da en el lado izquierdo póngola so la drecha.» «E quando te da por todo el cuerpo, ¿dónde la pones?» Dixo el páxaro: «Detrás en la cola.» Respuso entonces la raposa: «Esso tengo yo por grand maravilla, y no lo podía creer si no lo viesse. Y si lo hazes te digo que no hay ave en el mundo tan discreta ni que tanto sepa guardar a sí mesma.» Entonces el páxaro, de vanaglorioso y de necio, por demostrar su saber puso la cabeça entre las alas escondida cabe la cola. Y a mala ves le vio assí la raposa cubierto, asió d'él en un salto y díxole: «Amigo, bueno fuera que supieras aconsejar a ti mesmo como presumiste de aconsejar a los otros.»⁵

1 [鳩と狐]

鳩がとても高い木に巣を作り、巣にいる子供たちのところへ苦労して餌を運んでいました。ところが子供たちが巣立つ頃になると、きまって一匹の狐が木の下へやって来て、とても酷く恐ろしいことを言って脅すのです。そこで鳩は怖くなり、命を助けてもらうかわりに、子供たちを狐の餌食として差し出してしまうのです。

2 [鳩と助言する鳥]

向かいの木にいた鳥がこれを見て、鳩が子供たちを投げ落とすのをかわいそうに思って言いました。「あなたの残忍な行為と苦しみを見ると心が痛みます。あなたは恐怖のせいで分別を失くし、理にかなわないことをしています。だからひとつ助言をしてあげましょう。狐がいつものようにやって来てあなたを脅したら、こう言いなさい。『もしあなたが私のいる所まで登って来られるのなら、私が怖がるのもっともなこと。私の酷い行為も十分な理由のあることと言えるでしょう。その時にはあなたの脅しがきいて、私はあなたに子供たちを差し出すでしょう。けれども、あなたが登って来られないのなら、いくら脅かしても無駄なことです。私はあなたの手の届かない安全な所にいるのですから』と。」こう助言すると鳥は自分の木に戻っていきました。

3 [再び鳩と狐]

鳩の雛が巣立つ頃になると、あの狐が木の下へやって来て、いつものように威勢よく脅し文句を並べ始めました。鳩は言い返します。「狐さん、安全なところに住ん

でいる者を脅かしたって無駄なことです。私がいるここまで登ってこられたなら、その時には、子供たちをあなたに委ねると申し出ましょう。そうでなければ、辛抱してもらいましょう。なぜなのか理由もわからずにあのように酷いことを。私はよく考えてみました。もう子供たちを失うようなことはしませんから。」鳩がだれかに忠告されたばかりであるのを見抜いて、狐は言いました。「誰に忠告をされたのだ。それを教えてくれたら、もう二度とお前に嫌がらせをしたり、子供をよこせと言ったりしないと約束しよう。」鳩は答えました。「川岸の木の前にいるあの鳥です。」

4 [狐と鳥]

鳩を後に残して狐は鳥のところへ行き、とても親しげに言葉をかけて言いました。「ねえ君、よければ教えてくれないか。右側から風が吹いているとき、休むのに君は頭をどっちへ向けるんだい。」鳥は答えました。「左の翼の下に入れて。左側に風があたるときは、右の翼の下に。」「風が体中に吹きつけるときはどこへ？」鳥は答えて、「後ろの尾羽に。」すると狐は言いました。「それはとても素晴らしい。だが見てみないことには、とても信じられないな。それを見せてくれたなら、この世に君ほど思慮深く、自分の身を守ることをこれほど心得ている鳥はほかにはいないと思うだろうな。」すると、うぬぼれ屋で愚かな鳥は、自分の能力を示そうとして、羽の下に首を入れ、尾羽のあたりまで潜らせたのです。鳥が頭を隠したのを見るやいなや、たちまち狐は飛びかかり、鳥に言いました。「ねえ君、君はうぬぼれて他人に忠告を与えたが、そのように自分自身にも助言ができたらよかつたろうに。」

Ⅲ 『伊曾保物語』下巻28「鳩と狐の事」

1 [鳩と狐]

ある時、うへ木に鳩巣をくふことありけり。しかるを、狐その下にあつて、鳩に申けるは、「御辺は何とてあぶなき所に子を育て給ふや。この所におかせ給へかし。雨風の障りもなし、穴にこそおくべきけれ」と云ければ、をろかなる者にて、誠かと心得て、その子を陸地に産みけり。しかるを、狐すみやかに餌食になしぬ。

2 [鳩と隣の鳩]

其時、かの鳩をどろひて、木の上に巣をかけけり。然るを、隣の鳩教へけるは、「さても御辺はつたなき人なり。今より以後、狐さやうに申さば、「汝この所へあがれ。あがる事かなはずは、まつたくわが子を果たすべからず」とのたまへ」といへば、

3 [再び鳩と狐]

「げにも」といひければ、狐申けるは、「今よりして、御辺の上にさはがする事あるまじ。但、頼み申べき事あり。その異見をば、いづれの人より受けさせ給ふぞ」と申ければ、鳩つたなふして、しかじかの鳥と答ふ。

4 [狐と隣の鳩 (助言した鳥)]

ある時、かの鳩に教へける鳥、下におりて餌食を食みける所に、狐近づきて云、「そもそも御辺、世にならびなきめでたき鳥なり。尋申たき事有。其故は、罫に宿り給ふ前後左右より烈しき風吹時は、いづくにおもてを隠させ給ふや」と申ければ、鳥答云、「左より風吹く時は、みぎのつばさにかへりをさし、右より風吹く時は、左のつばさにかへりをさし候。前より風吹く時は、うしろにかへりをさし候。うしろより風吹く時は、前にかへりをさし候」と申。狐申けるは、「あつぱれその事自由にし給ふにおみては、誠に鳥の中の王たるべし。たゞし、虚言や」と申ければ、かの鳥、「さらばしわざを見せん」とて、左右に頸をめぐらし、うしろをきつと見る時に、狐走りかゝつて喰らい殺しぬ。そのごとく、日々人に教化をなす程ならば、まづをのれが身をおさめよ。我身の事をばさしおきて、人の教化をせん事は、ゆめゆめあるべからず。⁶

IV ドイツ語版『カリーラ』の「鳩と狐」

Das Buch der Beispiele der alten Weisen. [Urach 1480/81], Ulm 1483.

II章で引用したスペイン語版(1493)は直接には次章で扱うラテン語版から訳されたものであるが、そのスペイン語版刊行の契機ともなり、訳にも影響を及ぼしたと考えられているのがドイツ語版である。⁷これはドイツのヴェルテンベルク伯領の聖職者 Anton von Pforr が1470年頃にラテン語から訳したものである。

1 [鳩と狐]

Es hett ein tub ir nest vff einem hohen balmen vnd ward ir vast sur vnd arbeitsam, ir spyß so hoch zû tragen jren jungen. Vnd wann sy ire jungen mit grosser arbeit außgebrütet, so kam alweg ein fuchs vnd stünd vnder den boum und tröwet jr, wie er sy vud jr jungen essen wolt, vnd bracht sy mit tröwworten darzû, das sy jm die jungen selbs herabwarff, daz er sy sicher sagt.

2 [鳩と雀]

Vff ein zyt saß die tub aber vnd brütet ire eyger. Do stünd gegen ir ein spar uff einem ast, der nit ferr von ir by dem wasser sin wonung het, vnd do er die tub so trurig sach, do sprach er: «Nachgebur, was macht dich truren, so du diner

frucht so nähig bist?» Antwort die tub: «Waz fröuwen mich mine jungen? Wann wissz, sobald ich die außgebrüt, so kumpt der fuchs vnd tröuwet mir so hart vnd tringet mich durch forcht, die ich von jm gewinn, das ich jm meine jungen gib, vmb das er mich sicher sage.» Der spar sprach: «Kennest du nit den trügner, den fuchs? Volg minem rat, vnd der fuchs wirt dir fürer nit schaden thûn!» Die tub sprach: «Sag! Ich volg dir.» Antwort der spar: «Wann der fuchs mer kumpt vnd dich schrecken will, so sprich: «Thû alles din vermögen, noch jrt es mich nicht! Vnd wann du lernetest disen boum stigen, so wolt ich bald mine jungen uff einen andern boum tragen vnd will dir gantz nichtz geben.»

3 [再び鳩と狐]

In nachuolgender zyt kam der fuchs, do in beducht, daz die tub ir jungen außgebrüt hett, vnd tröuwet ir, wie vor. Die tub gab antwort, wie sy der spar gelert hett. Do sprach der fuchs: «Sag, wer hat dich dise antwort gewysen, so will ich dich vnd dine jungen sicher sagen.» Antwort die tub: «Das hat der spar gethon, der dort by dem waseer sin wonung hat.»

4 [狐と雀]

Der fuchs ließ von der tuben vnd nähiet sich dem sparen, vnd do er den by dem wasser fand, do grüßt er in tugentlich vnd sprach: «Lieber nachgebur, wie magst du dich vor dem wind vnd regen enthalten?» «Der spar antwort: «Wann mich der wind uff der rechten syten anweet, so kere ich min houbt vff die lincken syten, vnd wenn er mich vff die lincken syten anvichtet, so kere ich min houbt uff die recht syten vnd bin sicher.» Sprach der fuchs: «Dick kumpt ein wetter, das zû allen syten wind bringet.» Antwort der Spar: «So thû ich min houbt vnd hals vnder mine vettichen.» Sprach der fuchs: «Ich mein, daz solichs nit sin mög.» Der spar sprach «Ja wol mag das sin.» Antwort der fuchs: «Sälig sind ir vogel all, die got für annder geschöpfften begabet hat! Ir fliegend zwischen himel vnd erden in einer cleinen zyt, das menschn oder tier nit erlouffen mögen, vnd kummen dahin, da sust kein creatur hinkummen mag! Vnd darzû söllent ir die groß gnad vnd vorteil haben in wind, regen vnd schnee, wenn des not geschicht, das ir üwer houbt vnder üwer selbs vettichen bergen mögen, damit üch kein vngewitter schaden mag?» «O wie sälig sind ir! Zöug mir doch, wie das sin mögl!» Der spar wolt sin kunst vor dem fuchs öugen vnd schloufft sin houbt vnder sin vettichen. Die wyl erwackt in der fuchs in sine klouwen vnd sprach:

«Du bist, der jm selbs veind ist. Du kundest der tuben güt rät geben, ir jungen vor mir zû behalten, vnd kundest dir selbs nit raten.» Vnd fraß jn da nüchter.⁸

1 [鳩と狐]

鳩が高い椰子の木の上に巣を作った。しかし雛鳥にやる餌をそんなに高い所まで運ぶのはたいへん辛く骨の折れることだった。鳩がたいへんな苦勞をして雛を孵すと、いつも狐がやって来て、木の下に立ち、鳩とその雛鳥たちを食ってやるぞと脅かす。この脅し文句で、鳩は自分の命を助けてもらおうと、自分から雛を投げ落とすのだった。

2 [鳩と雀]

ある時、また鳩がすわって卵を温めていると、向かいの枝に雀がとまった。そう遠くない川の岸に住んでいる雀だ。鳩が悲しそうにしているのを見て、雀は言った。「お隣さん、何か悲しいことでも。誕生の日ももうすぐだというのに。」鳩は答えた。「子供が私になんの喜びとなりましょう。雛が孵ると、すぐに狐がやって来て、私はさんざん脅されます。私が怖くなって、自分の命を助けてもらおうと、生まれた子たちを引き渡すよう仕向けるのです。」雀は言った。「狐が詐欺師だってことを知らないの。私の忠告をお聞きなさい。そうすれば狐はもうあなたに悪さをすることもないでしょう。」鳩は、「聞かせてください。言われるとおりにしますから。」雀は言った。「まだ狐がやって来てあなたを脅そうとしたら、こう言うのです。『できるものなら、やってみなさい。私は何ともありません。おまえがこの木に登ってこれたとしても、すぐに私は子供たちをほかの木へと運んで行って、おまえには一羽の雛も渡さないから』と。」

3 [再び鳩と狐]

しばらくすると狐がやってきた。雛が孵ったと思ったからだ。そうしてこれまでと同じように鳩を脅かす。鳩は雀に教えられたとおりに答えた。すると狐は言った。「そのような返事をせよと誰に教えてもらったのだ。それを教えてくれれば、おまえも子供たちも命は助けてやろう。」鳩は答えた。「教えてくれたのはあの川岸に住んでいる雀です。」

4 [狐と雀]

狐は鳩を後に残して雀のほうへとやってくる。川の近くにいる雀を見つけると、丁寧に挨拶をして言った。「お隣さん、雨風から身を守るにはどうされますか。」雀は答えた。「風が右側から吹いてくれば、頭を左側へ向け、左側から吹き寄せれば、頭を右側へ向ける。これで安心。」狐が言った。「激しい嵐がやってきて、四方八方から風を吹きつけられれば？」雀は答えた。「そのときは頭を肩ま

ですっぱり羽の下へと。」狐は言った。「そのようなことはとてもできないでしょう。」雀は、「いや、できますとも。」すると狐は言った。「神さまが他の生き物たちのために恵んでくださったあなたがた鳥のみなさんは幸いです。あなたがたは天と地の間をわずかな時間で飛んでいきます。人や獣には許されないことです。そして他のいかなる生き物も到達できないところまで飛んでいくことができます。そのうえ、風や雨や雪の中で、必要とあらば頭を自分自身の翼の下に隠し、どんな嵐も無傷でやり過ごすことができると。あなた方はそれほど大きな恩寵を受けているのだとおっしゃるのですか。ああ、なんとあなた方は恵まれておいでなのでしょう。さあ、それがどのようなものか、ぜひ見せて下さい。」雀はその技を狐の目の前で披露しようと、頭を羽の下に潜り込ませた。その瞬間、狐は雀につかみかかり、「お前自身が身の仇。鳩に忠告を与え、雛を俺から守りはしたが、自分自身の忠告を忘れたのだからな」と言って雀を食べてしまった。

V ラテン語版『カリーラ』の「鳩と狐」

Directorium vitae humanae alias parabola antiquorum sapientum.(翻訳 1270 頃;写本 15 世紀;印刷 1484-1493 頃) ドイツ語版やスペイン語版、さらにはその他のヨーロッパ諸語の『カリーラ』の基になったのがラテン語版である。Johannes de Capua という人物が 13 世紀(1263-1278)に、ヘブライ語版から訳したとされるが、写本は 15 世紀(1444,1447,1470,時期不詳 1 本)より前のものは残っていない。訳は、訳者のせいも現存する写本の不備によるものかは分からないが、優れたものではないという。「鳩と狐」のテキストには欠落が指摘されている。⁹

1 [鳩と狐]

Erat quedam columba habens nidum in excelsa arbore, itaque magno labore escam ad arborem portabat. Et cum produceret suos pullos, aggrediebatur eam vulpes, stans iuxta arborem, et perterrens eam minationibus donec ei suos pullos eiicebat propter conservationem sue vite.

2 [鳩と雀]

Quod videns quidam passer stans contra eam in ramo arboris, accessit ad columbam dicens: Consulo tibi, quod quando revenit ille et infert tibi talia, respondeas: Fac posse tuum; et si laboraveris ascendere ad me, statim eos devorans volabo. Et abiit passer in viam suam.

3 [再び鳩と狐]

Post hoc rediit vulpes clamans contra columbam more solito. Cui respondebat columba verbum, quod sibi passer

consuluerat. Ait ad eam vulpes: Si annuaueris mihi illum, qui tibi hoc consuluit, dimittam pullos tuos. Dixit columba: Scias, quod passer, qui stat contra littus fluminis, mihi hoc consuluit.

4 [狐と雀]

Et relicta columba, iuit vulpes ad passerem et ait: Quando te ventus invadit, ubi reponis caput tuum? Et ait passer: Sub sinistro latere. Et quando percutit te in facie tua, ubi ponis tunc caput tuum? At ille: Ad mea posteriora. Ait vulpes: Quando venti te ex omni parte invadunt, ubi tunc ponis caput tuum? Ait passer: Sub alis meis. Ait vulpes: Quomodo potes hoc facere? estimo te non verum dicere; et si hoc scis facere, similem tibi non vidi. Et tunc passer volens ei hoc ostendere, reclinavit caput suum sub alis, quem vulpes rapuit dicens: Scivisti columbe prestare consilium et non tibi ipsi, et devoravit eum.¹⁰

1 [鳩と狐]

鳩が高い木の上に巣を作り、せっせつと餌を運んでいた。だが雛が孵ると、狐が近づいてきて、木の傍らから離れず、鳩を脅して震えあがらせる。とうとう鳩は、自分の命を助けてもらうために、狐にむかって雛を放り投げてしまうのだった。

2 [鳩と雀]

向かいの木の枝にいた雀がこれを見て、鳩のところへやって来て言った。「あんたにひとつ忠告をしてやろう。奴がまた来てそんなことを言ったら、こう答えるんだ——できるものなら、やってみなさい。たとえ私のところまで、どうにか登って来れたとしても、すぐに私は子供たちを一呑みにして飛んで行きます、と」こう言って雀は去っていった。

3 [再び鳩と狐]

そのあと狐が戻ってきて、いつものように鳩を大声で呼ぶ。雀に助言されたとおりに鳩は狐に言い返す。すると狐は、「これを誰に助言してもらったのか、おまえが教えてくれるのなら、子供たちの命は助けてやろう。」鳩は答えた。「川の向こう岸に住んでいる雀が助言してくれました。」

4 [狐と雀]

鳩を後に残して、狐は雀のところへやって来て言った。「風が吹きつけてくる時、おまえは頭をどこへやる。」雀は答えて、「左の脇の下に。」顔に風が叩きつけてくる時は、どこに?」雀は、「背中の方へ。」狐が「風が四方八方から吹き寄せてくる時は、頭をどこへやる」と問うと、雀は「翼の下に。」狐は言った。「どうしてそんなことができるのか。本当のことを言っているとは思

えないが。おまえにそれができるとしても、そのようなのは見たことがない。」そこで雀は狐にそれを見せてやろうと、首を傾けて羽の下へ入れた。すると狐は雀を捕えて、「おまえは鳩に助言をすることはできたが、自分自身にはし忘れたようだな。」そう言って雀を食ってしまった。

VI ヘブライ語版『カリール』の「鳩と狐」

ラテン語版の基になったのがヘブライ語版で、Joel という人物が1260年代以前にアラビア語版から訳したものである。唯一残る写本は半分ほどが失われているが、優れた訳であるという。以下はドランプール編訳の仏訳からの重訳。

1 [鳩と狐]

棗椰子の林の濃い葉影に一羽の鳩が卵を抱いていました。鳩の棗椰子の木はまっすぐ高く伸びていて、地面から草を巣へ運んでくるのに鳩は大変な苦勞をしていました。鳩が坐って卵を抱き、雛が孵る頃になると、いつもきまった時に一匹の狐がやって来ます。そして木のそばに居座り、鳩を呼んでさんざん怖がらせるので、鳩は狐に雛をほうり出してしまうのです。自分の命惜しさに、そのようにして身代わりに子供たちを差し出していたのです。

2 [鳩と雀]

ある日、鳩がそのように二羽の雛と一緒にいるところへ、棗椰子の枝に住む雀が訪ねてきました。鳩がしょんぼりと悲しそうにしているのを見て言いました。「まるで病人のようにふさいでどうしたのです。」鳩は答えます。「狐が私のものをすべて持っていってしまうのです。私の子供たちをいつも奪いにやってくるのです。木の下に居座り、私を呼び出して怖がらせ、私が狐に子供たちをほうり出すまでやめないのです。」雀は言いました。「狐がまたやって来て、あなたに声をかけたら、こう言いなさい。『あなたに投げてやるものなど何ひとつありません。お好きなようになさい。登って来れるものなら、来てみなさい。あなたが必死で登ってくる間に、私は子供たちを食って、飛んでいってしまいますから』と。」こう言って雀は川岸へ去っていきました。

3 [再び鳩と狐]

そこへ頃合を見計らい狐がやって来て、鳩を呼びます。しかし狐の言葉に鳩は、雀に教えてもらったとおりのことを言い返します。すると狐は尋ねました。「そのような助言を誰にもらったのだ。教えてくれたら、子供たちには手を出さずにいてやろう。」鳩は答えました。「川岸にいる雀です。」

4 [狐と雀]

狐はすぐに雀のところへ向かい、川岸にたたずむ雀を見つけました。狐は尋ねます。「風が右脇腹に吹きつけるとき時、おまえは頭をどこにやる？」雀は答えます。「左脇の下へ。」狐は続けて「それでは風が左側から吹く時は、頭をどこに置く？」「右へ」と雀。「風が正面からやってきたら、頭はどこへ？」「後ろへ。」「風が四方八方から吹いてきたときは、どこへやる？」「翼の下へ」と雀は答えます。狐はすかさず、「どうやってやるんだ？ 頭を翼の下にするなど。嘘をついているんじゃないだろうな。」「いえいえ、本当です。」狐は言います。「おまえたち鳥は皆、なんと恵まれていることだろう。神様には感謝しなくてはならないぞ。この世に生きる誰よりもおまえたちにそんな特技を授けてくれたのだからな。おれたちが一年かかっても行けないところを、おまえたちは一時間で天地の間を飛んで行ける。おれたちにはとても達することができない高みにおまえたちは到達できる。おまえたちは頭を翼の下に隠すことができる。おまえたちはやることなすこと恵まれている。さあ、どのようにするのか見せてくれ。」雀は頭を翼の下に潜らせました。たちまち狐は雀に躍りかかり、捕まえてへし折り言うことには、「鳩にあのような忠告をすることで、おまえがおまえ自身の敵となってしまったのだ。自分に忠告すべきであったのにな。」そうして狐は雀を殺して食ってしまいました。¹¹

VII アラビア語版『カーラ』の「鳩と狐」

ヘブライ語版などの基になったのがアラビア語版で、750年頃にイブヌ・ル・ムカッファイが今は失われた中世ペルシア語版——これは更にインドの『パンチャタントラ』を核とする——から訳したものである。邦訳『カーラとディムナ』（菊池淑子訳、東洋文庫）とその底本となったアラビア語版には「鳩と狐」は含まれていない。以下は、この話を伝える写本のテキストと仏訳を補遺としているドラムブルからの重訳。

1 [鳩と狐]

天まで届く高いナツメヤシの木の頂に鳩が子供たちと住んでいた。この鳩がナツメヤシの木のでっぺんに巣を作るときは、いつも苦労と困難が待っていた。それほどこのナツメヤシの木は高くてがっしりしていた。鳩は巣を作り終えると、卵を産み、それから卵を抱く。鳩が殻を破り雛たちがすくすく育ってくると、きまって狐がやってきた。雛たちが飛び立とうとする頃合いを見計らっていたのだ。狐は木の下に居座り、鳩を呼んで、「登っていくぞ」と脅す。すると鳩は狐に雛を放り投げるのだ。

2 [鳩と雀]

ある日、また雛が生まれて大きく育ってきた頃のこと、雀がやって来てナツメヤシの木に舞い降りた。鳩が悲嘆にくれているのを見ると、雀は言った。「真っ青な顔して、具合でも悪そうな様子。いったいどうしたの。」鳩は答えて、「狐が私を悲しい目にあわせるの。私に子供が生まれるたびに、脅しにやって来て、木の下で叫ぶの。私は怖くなって、狐に子供たちを放り投げてしまうの。」すると雀は言った。「今度狐がやって来て、あなたが言うようなことをしたら、こう狐に言ってやるのです。『もうあなたに子供たちを投げ与えたりはしません。私の所まで登って来てみなさい。命がけですよ。もしあなたがそうできても、そのときは私が子供たちを食ってしまいます。飛んでいったらもう大丈夫。』」雀は鳩にこう知恵をつけると飛んで行って、川の岸辺に舞い降りた。

3 [再び鳩と狐]

狐がいつもそうしているように、頃合いを見計らってやって来て、木の下に陣取り、叫び声をあげる。ところが鳩は、雀に教えられたとおりに答える。そこで狐は、「誰に助言をしてもらったのか、教えろ」と。鳩は「雀からです。」

4 [狐と雀]

狐は川岸へと向かい、雀の所へやってきた。佇んでいる雀を見つけると、こう言った。「おい、雀、風が右から吹く時に、おまえは頭をどこへやる。」雀は「左へ向けます。」「風が左から吹く時は、頭をどこへ置く。」「右へ、それか後ろへ。」狐は続けて、「風が四方八方から吹いてきたらどうする。」雀は答えて、「その時は頭を翼の下へ隠します。」狐は尋ねて、「なんだと。頭を翼の下に隠せるというのか。そう簡単なことではかろう。」「いやいや、できます。」「どうするのか見せてもらおうか。おまえたち鳥のやからときたら... 神様は俺たちよりもおまえたちを優遇したのだ。俺たちが一年かかっても行けないところをお前たちは一時間で行ってしまふ。俺たちには届かない高い所へ到達できる。おまけに頭を翼の下に隠して風と寒さを防ぐことができるとは。こいつはすばらしい。さあ、どうするのか見せてくれ。」そこで鳥は頭を翼に隠した。狐はすかさず飛びかかり、掴んで締め付け、息の根を止めんばかり。狐は言った。「おまえの本当の敵はおまえ自身だ。おまえは鳩に助言し、鳩のために策を授ける。だが、自分自身への助言はできずに、はては敵のなすがままだ。」そうして雀を殺して食ってしまった。¹²

終わりに

これまで時代を遡って各種の訳をみてきたが、この話

のクライマックスとなるのはいずれの版においても雀と狐の丁々発止とした言葉の応酬であり、この部分には大きな違いはない。それ以外で、翻訳が繰り返される過程で違いが著しくなると考えられる部分に焦点をあて、今度は時代順に一瞥しておきたい。以下で、[]は「鳩と狐」の話が入ってないもの。{}は推定。スペイン語版『カリーラ』までは文学史に沿ったものである。ヘブライ語版から派生したものでラテン語版以外のものもあるが、これは省略した。

[インドの『パンチャタントラ』など] (3-5世紀?)
 → [中世ペルシア (パフラヴィー語) 訳 (6世紀・散逸)]
 → アラビア語版『カリーラ』 (8世紀半ば) でイブヌル・ムカッファ以後に「鳩と狐」が追加 → ヘブライ語版『カリーラ』 (13世紀) → ラテン語版『カリーラ』 (13世紀)
 → ドイツ語版『カリーラ』 (1483)、スペイン語版『カリーラ』 (1493-96) → スペイン語版『イソップ』 (1546) で合本 → {}国字本『伊曾保物語』と天草本『イソポのハブラス』の基になったと推測される親本? {} (1580年代?)
 → [天草本『イソポのハブラス』 (1593)], 国字本『伊曾保物語』 (江戸初期)

鳩が巣を構える木は、アラビア語版、ヘブライ語版では「(棗) 椰子」(dattier, palmier)であったが、ラテン語版、スペイン版では高い「木」(arbor, árbol)である。ドイツ語版はラテン語版に基くにも関わらず「椰子」(balme[Palme])である。独訳者がヘブライ語版に接し得なかったとすれば、今は現存しないより整ったラテン語写本があって、それに依ったとも考えられるか。ヨーロッパで単に木となったのは、異国の椰子に馴染みがない読者を想定しての変更と考えられる。

雀が鳩に与える忠告のなかで、狐が木に登ってきた場合の対処法。アラビア語版、ヘブライ語版、ラテン語版は子供の雛を「食ってしまう」「呑み込んで(しまう)」(je mangerai, dévorerais, devorans)と凄みがあり、悲愴でさえある。ドイツ語版では「ほかの木に運んでいく」(uff einen andern boum tragen)と、もしも運べるのであれば、もっともと言えばもっともな答えである。スペイン語版では、狐が登って来たその時には、子供たちを「あなたに委ねようと申し出る」(ofrezco desmampararte)といたって冷静である。中世の雀は気性が激しく、近世の雀は理性的である。

風をどうやって避けるかという問答で、頭を翼の下に隠して風を避けることができるとはと、狐が驚いてみせる場面。アラビア語版、ヘブライ語版ではここで、人や

獣と違って鳥はわずかの時間で天と地の間を行き来できるという神様の祝福をもらっているのに、その上さらに頭を翼の下にと続いていく。天地の間を行き来できると褒めるのは雀の自尊心をくすぐり、話の展開と膨らみに効果をあげている。これはラテン語版、スペイン版にはない。ところがドイツ語版にはこれがあって、やはりこの点でもアラビア語版、ヘブライ語版に近いのである。簡潔さを意図しないかぎり、ここは外せないところである。

1489年スペイン語版『イソップ』は好評を博し、改版はあったであろうが3世紀にわたって増刷され、新大陸にも運ばれたといわれる。フランシスコ・ザビエルが1541年にポルトガルを出発し、各地で宣教活動を行い、日本にやって来たのは1549年。天草版イソップの印刷は1593年。国字本と天草本に共通する祖となる邦訳本があるとしたら1580年代かとの推測もある。日本版イソップの典拠・底本は1489年スペイン語版に求めるよりは、1546年版のほうが年代的にも可能性は高いと思われる。

その場合に気になるのは、1546年版からは、本論で検討したそれまでの版にはいずれも含まれていた「犬と司祭」の話が削られていることである。この話は『伊曾保物語』下巻29に「出家とゑのこの事」として含まれているのであるが。また、1546年版はこれまで含まれていた版画が全く用いられていない。版画入りのスペイン語版が、国字本の中でも万治2年絵入り整版本『伊曾保』にももしかしたら影響しなかっただろうか。いずれにせよ、ただひとつの版をもとに日本版イソップが作られたと考えるのであれば、こうしたことはそう問題とはならないであろう。

千数百年前にアラビアの空高くそびえる棗椰子の木のてっぺんに巣をかけた鳩から、江戸の植木に巣くう鳩に至るまで「鳩と狐」の話をたどってみた。鳩に助言する水辺の鳥はアラビア語版とヘブライ語版で「雀」と訳したが、これはドランプールの仏訳の moineau による。その注によるとアラビア語版では malik el-hazîn (悲嘆にくれる王)であり、ドランプールはこれを雀のあだ名であろうと推測して「雀」と訳している。ただし頭を翼の下に隠す最後の場面だけ、原文も訳も単に「鳥」となっている。同じ訳者によるヘブライ語版の訳も「雀」で一貫しているが、原文はやはり単に「鳥」である。訳者はアラビア語版に準じて訳したのであろう。ラテン語版で「雀」と訳した passer は、俗ラテン語 passar ですでに一般的な「鳥」の意味であるという。中世13世紀に訳され人文主義の時代に印刷されたテキストではどちらの意

ya si no lo sabia/supiese que no fizieron cosa contra nosotros las gra-
jas/ala qual no las mouiese natural enemiga. Respúo entó:es el rey.
pluguiera agora a dios q aquel cueruo que fue causa de tanto mal nūca
nāciera: 7 no fofuueramos nosotros tan grand infortunio 7 desdicha
ca peccaron 7 hizeró el daño nueftros passados: 7 pagamos nosotros
la pena. por dicho me tengo bien mirado el principio del odio/q no que-
daran contentos con lo que fizieron: mas abun querian perseguir nos
quantas vezes podran 7 por tanto feño: dixo el cueruo fera bien de bu-
scar algunos ingemofos remedios para nuestra salud 7 reparo. afin q
suplamos con las astucias lo q las fuerças nos negā. q muchas vezes
el discreto haze 7 acaba conel ingenio/ lo q el muy efforçado cōla fuerça
no puede acabar. como engañaró astuciosamēte tres choquareros vn
deuoto hermitaño: faziēdo le cō sus razones creber vno por al.



En los tiempos antiguos vn hermitaño gētil: lleuaua vn cabro q auia
q hauiā mercado pa fazer sacrificio a dios en su celda: 7 enl camino topo tres
cōpañeros: hōbres q se delectauā en bur-
las/ 7 como vieró el hermitaño hōbre simple: 7 d buenos re-
spectos. pēsaró como le podriā fazer depar el cabro. 7 dixo el vno dellos
marauillado estoy de hōbre tā tanto 7 tā bueno: por q razō lieua acue-
stas el perro. Eteradberamēte dixo el otro: cosa es de marauillar: que
segū el parece hōmbre de feño. 7 tanto en su habito: lleuar acuestas vn
h. iij

図版1

Añadidas **XCVIII**

veya. haues visto a mi hijo 7 como lo pēgūstā al mercader. Respódió por: cer-
to estādo ya aq poco ha: vi q descendio vna aue volādo: 7 si lo lleuo en las vias
lluyēdo aqñte el padre dio grādes boyes a los q estauā pñentes diziēdo. hōftes
nūca volotros q las aues d buelo se lieue los moços. Entōces respódió el merca-
der. no es de marauillar q en la tierra dōde los raciones se comē mil libras de fie-
rro q las aues se lieue los niños. Conofcio entōces el falso amigo q el mercader
por: vēgar se de su maldad lo renia. 7 ptió le por: merced: q le pdonasse 7 le boluī
esse su hijo: q el de buena gana le bolueria su fierro el q iustamēte le auia tomado.

**La mentira de muchos: muchas vezes
tiene lugar de verdad.**



En los tiempos antiguos vn hermitaño gētil: lleuaua vn cabro q auia
mercado pa fazer sacrificio a dios en su celda: 7 enl camino topo tres
cōpañeros: hōbres q se delectauā en bur-
las/ 7 como vieró el hermi-
taño hōbre simple: 7 de buenos respectos. pēsaró como le podriā fa-
zer depar el cabro. 7 dixo el vno dellos marauillado estoy de hōbre tā tanto 7 tā
bueno: por q razō lieua acuestas el perro. Eteradberamēte dixo el otro: cosa es de
marauillar q segū el parece hōbre de feño 7 tanto en su habito: lleuar acuestas vn
perro es cosa de neçio. Pēgūstole el tercero. di me padre: quieres vender esse pe-
ro q lleuas q no te fatigue. El hermitaño q oyo 7 pēfādo lo q lleuaua era perro
cō su bōdad crebio q era asi como ellos dezā como quiera q del pareçia cabron
7 asi le dero luego sin respōderles cosa ninguna: se fue cō vergēcia a su celda.
Ellos tomaró el cabro despues de su bida: 7 partieró feño.

En la mala muger no hay nada imposible:

En vna abdad habitaua vn carpintero: el q tenia muy linda muger
7 amaua la mas q al biuir: la qñ staua enamorada de vn escolar: en tā
to grado q sin el jamas se allegaua. Llegaró se los parientes 7 am-
igos del carpintero: por q el negocio era tan publico: q no se podia dis-
ij

図版2

**La vida y fabu-
las del clarissimo y sabio
fabulador Ysopo, nueuamente
emendadas.**

Exemplario, enel qual se contienen muy
buenas doctrinas, debaxo de
graciosas fabulas.



EN ANVERS
En casa de Iuan Staelso.

図版3

**Lo que eneste libro se
contiene, es lo siguiente.**

L a vida de Ysopo, a fol.	4
Las fabulas de Ysopo.	33
Las fabulas extrauagantes del Ysopo	67
Las fabulas de Ysopo de la traduccion nueua de Remicio.	89
Las fabulas de Aniano.	97
Las fabulas collectas de muchos autores.	112
Libro llamado Exemplario, enel qual se contienen muy buenas doctrinas de baxo de graciosas fabulas.	141

図版4

EXEMPLARIO.

270

roma como librasse a sus hijos de la raposa.

Tenia vna paloma su nido en vn arbol muy No es bñe
alto, enel qual con muchb trabajo lleuaua el co liso no sa
mer a sus hijos, p al tiempo que facaua los hijos ber guar-
legua vna raposa al pie de aqñ arbol, y amena- dar secre-
zaua la tan terriblemente y cruel, q de miedo la 10.
paloma por saluar la vida, daua los hijos ala ra-
posa para que los comiese. Y como lo viesse
vn paxaro que estaua en otro arbol delante
vno compaffion dela forma q la paloma echa-
ua a sus hijos, y dixole. Manjilla es y dolor de
ver tu crueldad y trabajo, y hazes de miedo lo
que no sufre razon ni natura. Porendete acón-
sejo que quando la raposa viniere, y te amena-
zare como suele hazer le digas, amigo si aca pu-
dieres subir donde yo estoy, mi temor fera ju-
sto p la causa de mi crueldad assaz razonable, y
podran tanto rus amenazas que te dare enesse
punto mis hijos, y si aqueito no puedes hazer,
por cierto en vano trabajas de amenazar a quiē
esta seguro de ti. Y dado aqñte cōsejo, se boluio
a su arbol el paxaro. Viniendo el tiempo q la pa-
loma facaua los hijos, llego la raposa al pie del
arbol, y comēgo de amenazar y brauear como
solia. Respōndio la paloma. Amiga mia el ame-
nazar es por de mas a quien biue en lugar se-
guro, si puedes subir aca dōde yo estoy ofrezco
desinapartarte enesse punto mis hijos, donde
no, roma paciencia, que no los delibero perder
tan cruelmente sin ver la causa por que. Quan-
do vio la raposa que la paloma tenia nueuo
consejo dixole. Si me dizes quē te dio este cōse-
jo, ofrezco te de nūca te enojar, ni pedirte mas
tus

図版5

O wie salig sind Ic. zeig mir doch wie das
 sin mag. Der Spar wolt sin künst vor dem
 fuchs eigen vnd schlouft sin houbt vnder
 sin rüttelchen. Die wolt erzwaelt in der fuchs
 in sine klouen vnd sprach Du bist der sin
 selbs vrend ist Du kündest der tüben gutten
 rat geben Ic lingen vor mir zu behaltenn
 vnd kündest die selbs mit raten vnd fraß in
 Damit hatt die end. *Reguntur figura huius*

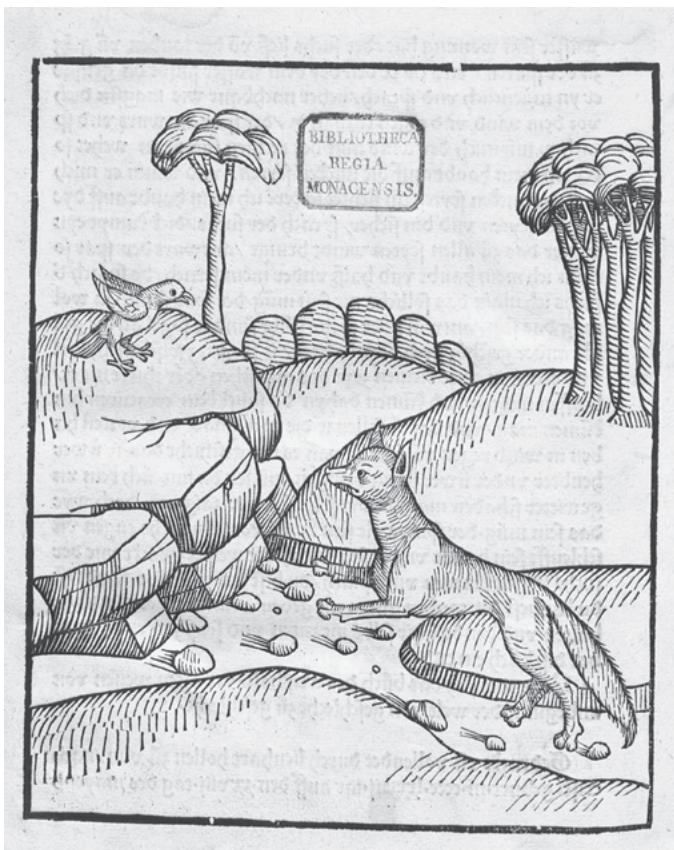


図版6

sind zeig mir doch wie das sin mag. Der Spar
 wolt sin künst vor dem fuchs eigen vnd schlouft
 sin houbt vnder sin rüttelchen die will erzwaelt
 in der fuchs in sinen klouen vnd sprach Du
 bist der sin selbs vnd ist Du kündest der tüben
 gutten rat geben nec lingen vor mir zu behaltenn
 vnd kündest die selbs mit raten vnd fraß in



図版7



図版8

passion dela forma como la paloma echau sus fijos: 7 dixo le. manzilla
 es 7 dolor de ver tu crueldad 7 trabajo: 7 hazes de miedo/lo que no cu-
 fre razon ni natura. Pdoende te consejo que quando la raposa viere
 7 te menazare como suele hazer/ le digas: amiga. si aca pudieres sobir
 donde yo estoy/ mi temor sera iusto: 7 la causa de mi crueldad afaz razo-
 nable: 7 podran tanto tus amenazas que te librare en esse punto mis fi-
 jos. 7 si aquesto no puedes hazer: en vano trabajas de amenazar a qen
 esta en seguro de ti: 7 dado aqueste consejo/ se boluo a su arbol el para-
 ro. Amiendo el tiempo que la paloma sacaua los fijos: llego la raposa
 al pie de arbol: 7 començo de amenazar 7 brauear como solia: respufo
 la paloma. Amiga mia el menazar es por demas/a quien viue en lugar
 seguro: si puedes sobir aqua/donde yo estoy: offresco de sinamparar te
 en esse punto mis fijos: donde no/ toma paciencia. que no los delibero
 perder tan cruelmente: sin ver causa por que. Bende que vio la raposa
 que la paloma tenia nueuo consejo: dixo le. Si me dizes quié te dio este
 consejo: offresco de te de nica enojar/ mi pedir te tus fijos. Respufo la pa-
 loma/ esse pararo que esta alli delante en esse arbol/enel oallo del rio. 7
 dexando la paloma/ fue se la raposa al pararo: 7 h-blendo le con pala-
 bras muy amigables le dixo. di me amigo si goyses: quando te da el vien-
 to del lado dzecho/donde pones por reposar la cabeza. Respufo el pa-



図版9

味になるのか。この俗ラテン語に遡るスペイン語では中世から現在に至るまで「鳥」の意味である。ドイツ語版の *spar* は今では *Sperling* にとって代わられた古語で、意味は「雀」である。本論で扱った15世紀のスペイン語印刷本以前になるが、13世紀のスペイン語訳『カーラ』の写本でこの鳥は *alcaravan* であるという。この語は現代のスペイン語辞典にはイシチドリという訳があるが、アラビア語の *karawān* に由来するとされ、こちらは鳴か鷺の類の水辺に生息する鳥のようである。白鷺ないし青鷺はアラビア語では「悲嘆にくれる王」という別名があるとするページもある。風格もあり、水辺で狐に食われるのなら合点がいく。

図版説明

図版 1. スペイン語版『カーラとディムナ』
Exemplario contra los engaños y peligros del mundo. Zaragoza 1493 (Pablo Hurus) 刊の「騙された修道者」(*La mentira de muchos muchas vezes tiene lugar de verdad* 何人もが同じ嘘をつくると本当に思えてくる話)の版画とその下にテキストの部分。[スペイン国立図書館 / Biblioteca Digital Hispánica/PID:bdh0000174126 /PDF ファイル 201 の 119]

図版 2. スペイン語版『イソップ』*Libro del Ysopo* : famoso fablador, historiado en romance. Burgos 1496 刊の終結部の「騙された修道者」[本論の表の *Kalila* から (2)] の版画とその下にテキスト。図版 1 の『カーラとディムナ』からの転用が明らかである。[フランス国立図書館 / 電子図書館ガリカ (Gallica) / <http://gallica.bnf.fr/ark:/12148/bpt6k8541711/f201.image>]

図版 3. スペイン語版『イソップ』*La vida y fabulas del clarissimo y sabio fabulador Ysopo*. Anvers (アントワープ) 1546/47 刊の表紙。[スペイン国立図書館 / Biblioteca Digital Hispánica/PID:bdh0000105033 /PDF ファイル 567 の 7]

図版 4. 同上書の巻頭目次。『カーラとディムナ』(*Libro llamado Exemplario...*) は第 141 葉から始まり第 270 葉まで。[同上 PDF ファイル 567 の 8]

図版 5. 同上書の「鳩と狐」の部分。本論で引用した『カーラとディムナ』のテキストは、1493 年版を基礎に 1494、1498 年版を含めて校合し綴字法を現代風にした 2007 年版で、この図版のテキストとは綴り字や語句・略字などに若干の違いがある。本論での引用箇所はこの図版の本文 2 行目から。[同上 PDF ファイル 567 の 553]

図版 6. ドイツ語版『カーラとディムナ』*Das Buch*

der Beispiele der alten Weisen の 15 世紀の写本。Holland 1860 校訂本での写本 A = Heiderberg, UB, Cod. Pal.Germ.84。「鳩と狐」の挿絵とテキスト。図版のテキストは本論での引用の最後の部分の '*O wie sälig sind ir*' から。綴字は異なる箇所があるが、ほぼ同文。[ハイデルベルク大学 <http://digi.ub.uni-heidelberg.de/diglit/cpg84/0485>]

図版 7. ドイツ語版『カーラとディムナ』の 15 世紀の写本。Holland 1860 校訂本での写本 C = Heiderberg, UB, Cod.Pal.Germ.466。「鳩と狐」の挿絵とテキスト。図版 6 とほぼ同じ部分で '*sind ir*' から。[ハイデルベルク大学 <http://digi.ub.uni-heidelberg.de/diglit/cpg466/0586>]

図版 8. ドイツ語版『カーラとディムナ』の印刷本 Ulm 1483 刊の「鳩と狐」の版画。[バイエルン州立図書館 http://daten.digital-sammlungen.de/~db/0002/bsb00029288/image_392]

図版 9. スペイン語版『カーラとディムナ』
Exemplario contra los engaños y peligros del mundo. Zaragoza 1493 (Pablo Hurus) 刊の「鳩と狐」。図版のテキストは本論引用箇所の [鳩と雀] の部分の 2 行目 [com]passión から。[スペイン国立図書館 / Biblioteca Digital Hispánica/PID:bdh0000174126 /PDF ファイル 201 の 192]

注

- 1 小堀桂一郎 (2001) p.182。ただし「鳩と狐の事」については遠藤潤一 (1987) p.239ff。Web「インターネットで蝉を追う」第 13 章 <<http://web.kyoto-inet.or.jp/people/tiakio/cicada/isopo.html/2014.9.30> アクセス>。
- 2 小堀桂一郎 (2001) p.228ff。遠藤潤一 (1987) p.491ff。ポッジョについては伊藤博明 (2009) に詳しい考証があり、後述のアルフォンシについては西村正身訳『知恵の教え』(1994) を参照。
- 3 ここで終結部とは、シュタインヘーヴェル版とスペイン語版の最後の部分で、アルフォンシに続くポッジョの最初の話からとする。1489 年スペイン語版の英訳は参考文献を参照。
- 4 『カーラ』からこの 3 話が加わったことについては M.H. Cortés (2007) p.25。
- 5 テキストは M.H. Cortés (2007) p.275ff. による。図版 5 のテキストとの字句の違いについては、図版の説明を参照。
- 6 『仮名草紙集』(日本古典文学大系 90)1965. 463-464 頁。
- 7 Holland (1860) p.248。

- 8 テキストは Holland (1860) pp.190-191 による。
- 9 Holland (1860) p.247.
- 10 テキストは Derenbourg (1887) pp.320-322 による。
- 11 Derenbourg (1881) pp.306-309 のヘブライ語本文に付された仏訳からの重訳。
- 12 Derenbourg (1887) p.346-349 で巻末補遺としてアラビア語本文に付された仏訳からの重訳。

参考文献

- 『仮名草紙集』(日本古典文学大系 90) 1965.
- 小堀桂一郎『イソップ寓話—その伝承と変容—』講談社学術文庫 2001 (中公新書 1978) .
- 遠藤潤一『邦訳二種伊曾保物語の原典的研究総説』風間書房 1987.
- ペトルス・アルフォンシ『知恵の教え』(西村正身訳) 溪水社 1994.
- 伊藤博明「ポッジョ・ブラッチョリーニと『伊曾保物語』」埼玉大学紀要 (教養学部) 第 45 巻第 2 号、2009.
- Holland, W.L.(ed.): *Das Buch der Beispiele der alten Weisen nach Handschriften und Drucken*. Stuttgart 1860.
- Derenbourg, J. (ed.): *Deux versions hébraïques du livre de Kalilâh et Dimnâh*. Paris 1881
- Derenbourg, J. (ed.): *Johannis de Capua, Directorium vitae humanae alias Parabola antiquorum sapientum. Version latine du livre de Kalilah et Dimnah*. Paris 1887.
- De Blois, François: *Burzōy's voyage to India and the origin of the book of Kalilâh wa Dimnah*. London 1990.
- John, E. K. and Keating, L.C. (tr.): *Aesop's fables, with a life of Aesop, translated from the Spanish*. University Press of Kentucky, 1993.
- Cortés, M.H. (ed.): *Exemplario contra los engaños y peligros del mundo: estudios y edición , dirigido por Marta Haro Cortés*. Valencia 2007.
- Fansa, M. und Grunewald, E. (ed.): *Von listigen Schaklen und tōrichen Kamelen. Die Fabel in Orien und Okzident*. Wiesbaden 2008.